

今年もラトビアの大切な歳時「夏至祭」を祝いました【2015年6月21日（日）】

東郷武会長のご自宅で恒例の「夏至祭」が開催。総勢31名の参加者が、今年も花冠作りや黒パンをはじめとしたラトビア料理など、夏至祭を楽しみました。



花冠は夏至祭の必需品

花冠作りを見ていると自然に心が躍ります



夏至祭では日本人とラトビア人の交流も深まりました

お互いの文化をさらに知る機会になったのではないのでしょうか

今年の夏至祭では3年ぶりにラトビアのラジオ番組に出演することに。世界各国に住むラトビア人が夏至祭の歌「Visas puķes uziedēja」（全ての花咲く）をその国の言語とラトビア語で歌うという番組の収録がおこなわれ、ラトビア人留学生や協会会員、トークサロンメンバーなど、その場にいた全員で参加しました。

午後6時30分、いよいよリガにスタジオを構える放送局Radio SWHとの中継がスタート。まず、事前に繰り返し練習した夏至祭の歌「Visas puķes uziedēja」（全ての花咲く）を歌った後、さらにラトビア語の歌「Ai, Jānīti, Dieva dēls」（ヤーニス、神の子）にチャレンジ、最後は日本の唱歌「夏は来ぬ」を披露。日本での夏至祭の雰囲気ラトビアへ届けました。

夏至祭の最後は、ウナ・ヴォルコヴァさんと鶴田宜江さんによるミニ・コンサート。お二人の歌声とラトビアの民族楽器クワクレが奏でる調べを聞いていると、ラトビアの美しい景色が目の前に広がるようでした。

夏至祭の晩は途中から雨が降り出しました。「せっかくのお祭りが…」と思っていると、「ラトビアでも夏至祭の日はほぼ毎年、雨が降りますよ」とラトビア人留学生。両国を隔てる7千キロの距離がぐっと近づいた瞬間でした。

（金田 直樹）



収録に向けて特訓中のひとコマ。
この日だけでも「歌う民族」の仲間入り！？



緊張の本番でしたが、特訓の甲斐あって
収録は成功裏に終わりました



お開きの前に、全員で集合写真を撮りました